

## 審査結果の要旨

### (1) 研究の目的に意義や独創性があるか

本研究は、児童・生徒が学校外で得るインフォーマルな音楽経験、特に聴取経験を音楽科の創作活動へ活用する可能性を検討・検証・提案したものである。「日常生活の中で J-POP を中心としたポピュラー音楽を聴き親しむ日本の児童・生徒は、その聴取経験から音楽を創作するための基礎的な知識や能力を潜在的に有している」という仮説的視点から次の3段階を経て研究が遂行された。

①J-POP の音楽構造の分析に基づいた、J-POP 風旋律の創作方法の構築

②構築した創作方法を用いた小・中学校における実践とその検証

③実践の検証に基づいた、音楽科の創作活動で J-POP を取り上げる教育的意義の考察

本研究で示された創作活動は、これまでの音楽科教育研究において対象とされなかった課題であり、新たな研究・実践への提案を有した独創性を持つものである。また、児童・生徒の日常の音楽聴取経験を音楽科の創作に活かす、授業実践の具体的方法について検証実践を踏まえて提案した点からも、教科教育学の研究としての意義が認められる。

### (2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は上記の課題に対し、文献研究、音楽分析、実践研究の3つの方向から取り組んでいる。なお、本研究における「J-POP」という音楽様式は、ポピュラー音楽研究の視点から、「1990年代以降に日本で生産された流行音楽」と定義されている。

第1章では、本研究の対象とする J-POP・歌謡曲の変遷および音楽科における創作活動の実践に関し、文献調査に基づき先行研究が批判的に検討されている。ここでは、主に1989年から2013年に発刊された雑誌『教育音楽中学・高校版』における、本研究に関連する内容が分析された。

第2章では、創作教材として J-POP を扱う上での諸課題について、教材化の視点を得るために、音楽聴取に関する文献研究が行われた。J-POP は音楽産業と切り離せない音楽であり、その聴取行動はマスメディアや周辺機器の進化に伴い変容している。流行現象が、ある音楽的特徴に包含されるグループ単位で生じることに着目し、創作教材と方法を開発するにあたって、J-POP の音楽的特徴を「流動的な要素」と「不変的な要素」の二層から捉える必要性を提唱した。

第3章では、音楽分析の手法が研究方法として用いられている。まず既存の音楽教育における旋律創作方法と関連付けるための2つの音楽的特徴を検討し、その特徴を有する J-POP を選択し分析が行われた。

第1の分析は、J-POP における「同音に連続傾向のある旋律」である。2000年以降の J-POP から該当する典型的な楽曲を抽出し、以下の4点から分析が行われた。即ち、①2音間の旋律の音高の推移、②同音での連続進行以外の旋律の移動推移、③コードトーンと旋律音の音度関係、④旋律の各音高の拍数の割合、である。その結果、この種の旋律の形成音は、反復する音／経過する音／反復音に回帰する音の3つに大別され、それを踏まえた創作モデルが考案された。

第2の分析は、「J-POPの旋律にみられる〈反復〉〈変化〉〈応答〉」である。具体的には、選択したJ-POP楽曲の旋律を、①反復部分の音楽的特徴（反復の回数、音価、音高、リズム）、②反復部分と他の部分の比較、③コードトーンと旋律音の音度関係の観点から分析した。その結果、対象とした旋律の反復は、リズムの反復（音高と歌詞は反復しない）、リズムと音高の反復（歌詞は反復しない）、リズムと音高と歌詞の反復、の3つに分類された。

上記2つ分析結果から、旋律における非和声音がときにテンション音として解釈される余地を含むことによって、同一の旋律創作方法に多様なコード進行を適用できることが提示された。これらは、J-POPの音楽分析に基づいた旋律創作モデルを提案したものとして評価できる。

第4章では、提案された旋律創作方法に基づき、現職教員と共同で行った3つの実践の省察および検討がなされた。これらは、音楽科教育研究における実践研究の方法によるものである。

第1の実践は、筑波大学附属小学校5年生との「同音が連続する旋律構造」を用いた方法による旋律創作の授業である。第2の実践は、お茶の水女子大学附属中学校2年生を対象に、同様の構造を用いた旋律創作の授業である。第3の実践は、2016年度に同中学校における「J-POPにみられる〈反復〉〈変化〉〈応答〉」を活かした旋律創作の授業である。

いずれの実践においても、授業における児童・生徒の創作を音源で記録し、抽出した作品を5線譜に採譜して分析し、活動に関する児童・生徒への質問紙調査を行っている。以上の実践の検討により、第3章で提案された旋律創作方法は、学習者が主体的に用いることが出来る「足場」として機能しており、その「足場」を用いて児童・生徒自身のJ-POPの聴取体験と関わらせながら旋律を創作することが可能であることが実証された。

本研究は、文献研究と実践研究の双方を統合して行われており、音楽科教育学における研究方法として妥当性を持つものとして評価することができる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究テーマに関する音楽教育分野の先行研究はまだ少なく、それらのレビューは充分に行われている。また第1章で分析の対象とした雑誌『教育音楽中学・高校版』の記事分析は、J-POPという語が生まれた1989年以降、実践研究を行う2013年までが網羅されている。第2章、第3章の内容に関しては、学術的研究がまだ少ない分野ではあるが、本研究の目的である児童・生徒の創作方法の開発・提案という目的に応じ、適切な楽曲の選択と分析が行われた。これらに際しては、一般的な音楽分析と音楽教育における用語の違いについても補足・言及されている。

第4章の実践研究においては、生徒の創作した旋律の使用音に関しての量的な分析がなされており、旋律創作モデルの有用性が実証されている。また、創作の録音記録、採譜、質問紙の分析に関しても適切に行われている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

以上を踏まえ、第5章において以下の3点の結論を得た。

①J-POPの音楽構造に基づいた旋律創作方法は、従来の音楽科の旋律創作方法に関連付けて展開することが可能である。

②J-POPの音楽構造を用いた旋律創作方法は、小学校・中学校の実践において、児童・生徒が主体的に活用することが出来る「足場」としての機能から有用性がある。

③J-POP 風の旋律創作は、児童・生徒の日常生活での音楽聴取経験を活かしながら活動を行うことが出来る点において、音楽科の創作教材としての教育的意義を有する。

本論で実践を行った児童・生徒の多くは、彼らが授業での音楽学習経験を得る前に、既に J-POP の聴取を通じて音楽的に豊かな経験を学校外でインフォーマルに持っていた。本研究は、音楽を創作するための知識と能力を児童・生徒が潜在的に有しているという現実を再認させ、その音楽能力を引き出す旋律創作の具体的方法を示している。音楽科教育は、音楽に関する知識や技能を児童・生徒に提供するだけでなく、彼らが既に潜在的に有している音楽的能力を引き出すという方向からも、実践や活動の方法を開発していくことが可能である。

本研究に関連して、学位申請者は複数の論文を執筆し、そのうち2点は査読付きの論文集および学会誌に掲載されている。「中学・高等学校における J-POP を用いた実践の展開-雑誌『教育音楽』中学・高校版 1989-2013 年の次期分析を通して」は、本学連合大学院『学校教育学研究論集』に掲載されたもので、学位論文の第1章の基本的な内容を構成している。また、「中学校音楽科における J-POP の音楽構造を活用した音楽づくりの実践」は、日本音楽教育学会の『音楽教育実践ジャーナル』に掲載され、学位論文の第4章の内容に含まれている。その他に執筆された論文等を含め、全体として本研究は音楽教育学の学術的な水準に達しており、またその考察と結論においても、妥当なものであると審査委員会より評価された。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究は、これまでの音楽科教育におけるポピュラー音楽を扱った実践・研究、旋律創作の実践・研究を踏まえ、J-POP という音楽様式を創作の実践において展開する新たな方法とその可能性を提示した点において独創性を持つものである。音楽教育学において、今後の研究が望まれる領域であり、さらなる研究の基礎に位置づけられるものとして、審査委員会より取得学位にふさわしい意義と成果が認められた。